

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第25号 2016年10月31日 発行

目次

- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| *『慶應義塾 150 年史資料集』第2巻の刊行……………2 | *平成28年度『福翁自伝』をたどる旅 |
| *「KEIO BAKA」の学徒出陣（神代忠男氏講座記録）…3 | および中津市アーカイブズ講座……………9・10・11 |
| *日韓近現代史をめぐるワークショップ……………4・5 | *主な動き……………11 |
| *ワークショップに参加して（梁 熙晶氏）……………6 | *センター諸記録（2016年4月～2016年9月）……………12 |
| *水上瀧太郎「遺品」の紹介（網倉 勲氏）……………7・8 | |

日米開戦前夜のハワイ遠征とシャコ貝

このシャコ貝は、昭和15（1940）年夏、慶應野球部のハワイ遠征土産として、予科英語教師亀井常蔵に贈られたものである。選手たちが荒縄でしばって運んできたと伝えられ、恐らく亀井と同郷の米子出身でとりわけ関係が深かった井上親一郎（後に国鉄スワローズ初代主将）のいたずら心に由来するものと想像されている。重さは約20キロ。

ハワイ遠征の野球部一行は、石丸重治部長以下18名で、米海軍や日系人等の現地チームと8勝2敗の成績を記録した。常蔵は戦後間もなく逝去したが、貝殻は亀井家の自由が丘の自宅玄関先に置かれ続け、その後3度の転居の際にも捨てられず、一時は金魚鉢としても使われた。常蔵の元に学生から届いた戦地からの手紙等とともに、昨年、当センターの「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトに寄贈された。日米開戦前年のハワイ遠征の存在を今に伝える興味深い物証といえよう。（2015年 亀井源太郎氏寄贈）



ハワイに向かう船上からの
亀井常蔵宛井上親一郎葉書



ハワイ遠征中の慶應野球部一行
前列中央に井上親一郎



『慶應義塾 150 年史資料集』基礎資料編・第 2 巻の刊行

都 倉 武 之

2016年3月、慶應義塾150年記念事業として当センターが編纂を継続している『慶應義塾150年史資料集』の基礎資料編・第2巻が刊行された。本巻は「第1部 教職員情報」「第2部 教育体制関係資料」の2つの内容を収録している。

「第1部 教職員情報」は下記の3節から構成されている。

I 初期教職員一覧 明治23年の慶應義塾大学部創設以降は、定期的な刊行物によって教職員・役職者の一覧を得ることができる。ここではそれ以前の教職員・役職者を様々な文献から拾い出し、人物ごとに集約し並べている。収録人名は266名である。

Ⅱ 明治23年以降教職員・役職者一覧

明治23年から発行された「慶應義塾学事報告」を主たる資料としてその発行が中断する昭和18年度までの教職員・役職者の情報を人物ごとに集約したものである。収録人名は5000名を超える。

Ⅲ 外国人教師一覧 創立～昭和19年にいたる期間に雇われた外国人教師に関する情報を集約し一覧にしたものである。収録人名は181名である。

ずれについても、過去の刊行物の情報を丹念に比較検討する作業を必要としたが、資料の誤字脱字の多さ、不正確さに直面し、統合作業は困難を極めた。とりわけ第1部Ⅱは、当巻編集委員柄越祥子氏の何年にもわたる緻密な作業の賜である。また、Ⅰ・Ⅲは同じく山根秋乃氏の作業によるものである。150年史資料集編纂委員からは、米山光儀前所長、都倉の2名が本巻を担当した。

[illegible]

「第2部 教育体制関係資料」212ページ

[illegible]

「第1部 教職員情報」430ページ

「第2部 教育体制関係資料」は、慶應義塾の教育体制を理解する上で不可欠な主要な諸規則類の改正歴、主要な年の本文(全文)を収録し、変遷を整理した。

本巻によって、ある教員が慶應義塾においてどのような科目や役職を担っていたかを編年的に辿ることが可能となり、また在職時の組織体制や規則なども知ることができるようになった。そのためには第1部、第2部い

なお、当初の刊行計画では、第1巻の刊行予定が2010年であり、以後1年ごとに一冊を加え、20年間で事業を完結するということになっていた。しかし、第1巻の刊行は、実際には2012年となり、本巻はさらにその後3年を要した。これは150年事業としての本資料集の刊行が、福沢研究センターに一切任されている実情がありながら、この事業を継続的に進行する基盤が、必ずしも十分センターに整っていない現状を如実に表している。また、基礎的な資料を順次活字化していくという当資料集の基本構想自体が、近年の諸大学等における資料編纂や公開の実情とは必ずしもそぐわないという状況も生まれている。

本資料集は今後第3巻(諸統計資料集成)第4巻(刊行物解題)と、刊行を重ねる予定であるが、同時にそれぞれの情報の性質に即して、データベースによる公開等、その他適切な形態を模索しながら資料編纂を継続していきたいと考えている。編集作業を円滑に進行させながら、価値を失わない資料の公開を目指していくことが本資料集の大きな課題であり挑戦といえよう。

昭和 19 年三田会幹事・神代忠男氏講演 「KEIO BAKA」の学徒出陣

神代忠男氏は大正 11 年 8 月 16 日に東京・渋谷で生まれ、昭和 4 年の幼稚舎入学以来慶應義塾で学んだ。14 年に普通部修了、経済学部予科に入り、18 年 12 月、学部 3 年時に学徒出陣で陸軍へ入隊、19 年 9 月入営中に大学卒業となった。陸軍では近衛歩兵第三連隊、習志野の予備士官学校、浜松の第一航空測量連隊、仙台の陸軍飛行学校を経て、浜松で通信の教官を務めているときに終戦となった。戦後は同期の卒業生による昭和 19 年三田会の代表幹事として精力的に活動されている。以下は 2016 年 6 月 20 日に日吉で行われた講演の概要である。（要約作成：横山寛）

大学予科の生活

今日は戦前の学校と戦争という命題をいただきましたので、最初に学校の話をしていまして、今と学制が違っていて、戦前は小学校 6 年中学校 5 年で、次は大学 6 年。予科 3 年、学部 3 年に分かれていました。よく「あなたの学生生活は戦争ばかりで面白くなかったのでは」と聞かれますが、そんなことはないんですね。私は昭和 14 年に予科に入りましたが、そのころまだ戦争の影響はなかったです。例えば双葉山が六十九連勝していたところ安芸ノ海に外掛けで負けて大騒ぎになりました。私はそれをちょうど国技館の NHK の放送席のすぐ後ろで見ていて、座布団が舞って大騒ぎになった。まだそういうのんびりした時代だったんです。日吉の三年間は私の人生で一番楽しかった頃で、日本が勝っていたし、食料もそれほど不足していませんでした。日吉も今と違い記念館のところは原っぱで、駅の向こう側も何にも無かった。書店と食堂と大福屋以外は原っぱでした。日吉は慶應の学生しかいなかったです。

今との大きな違いは二つで、一つは女子学生がいなかった。我々は男子だけで索漠たる学生生活でした。慣れないから女の子の前では一言も話せない、非常に純情可憐だったわけです。一度も共学で学んだことがないので今の学生が本当にうらやましい。もう一つは制服制帽。慶應は丸帽で早稲田は角帽。銀座なんかを歩いていると帽子でどこの学校かすぐわかってしまうので悪いことはできませんでした。もっとも今のあなた方がするくらいの相当やんちゃなことはしましたがね。当時の塾長の小泉信三先生は礼儀やしつけ、服装に厳しくて、外套の襟をたてない、マフラーもだめ、東横線では学生は座らずに立っていると指導されました。高輪の家から日吉に通うためにバスに乗るとき、まさか小泉先生に会うとは思わないから襟を立ててポケットに手を突っ込んでいて、よく停留所で御殿山に住んでいた小泉先生の娘さんに会いました。先生に言いつけられるといけないうちであわてて襟を直してポケットから手を出していました。

このように学生生活は女子のいない無味乾燥なものでしたけれど、それはそれでそれなりの楽しみがありまして、授業が休講や早く終わったときには多摩川でボートに乗ったり、渋谷や横浜に行ったりしました。当時の横浜で栄えていたのは伊勢崎町でそこで遊ぶのを「崎ブラ」と

といった。渋谷はそんなに賑やかじゃなかった。私はもとの東急文化会館、現在の渋谷ヒカリエの場所で生まれましたが、喫茶店は 2 軒しかなく、渋谷は郊外でした（その時の戸籍は東京市外中渋谷）。

学徒出陣に際して

昭和 16 年 12 月に太平洋戦争が始まって翌年にシンガポールを占領したときは、日本人がオリンピックで金メダルを取ったときよりすぐて銀座通りなんかを提灯行列しました。そのころは将来惨めな生活をするとは夢にも思わない、浮かれていた時代でした。それが昭和 18 年の 9 月になって急に大学生も戦争に行くことになりました。当時大学生は卒業まで徴兵を猶予されていたのが、戦争に必要な工学部と医学部を除いて若き兵士の人員不足のため召集されることになった。そのとき私は夏休みで友達的那須の別荘で麻雀をしていて、そこでラジオで大学生の徴兵延期を停止するニュースを聞いたのです。それで麻雀をやめてみんなで酒を飲んで残念会をやったわけです。

入隊まではいそがしい。地方からきた学生は本籍地で徴兵検査を受けるため国へ帰る。壮行会もある。神宮外苑では有名な出陣学徒の壮行会がありました。しかし私は恥ずかしいことにこれに行かなかった。くだらない話ですがなんで行かなかったのか話しますと、これは銃を担いで行くのですが、教練で使っている三八式の古い重い銃を前日に学校で借りておくわけです。それで翌日ゲートルを巻いて家を出ようとしたら、相撲部と射撃部の友達二人が来て、おい雨が降ってきたぞ、こんなとき行ったら銃を汚すと掃除して返さなくちゃで面倒くさいし、神宮で行進したってどうせ東条首相が例の調子で頑張っているだけだから行くのをやめようと言われ、結局二人の誘惑にのって行かなかったんです。それでせっかくだからどこかへ行こうということになり、戦争へ行ったら女性にも会えないので、有楽町の日本劇場で日劇ダンシングチームのショーを見に行きました。これは大失敗で、戦後必ず壮行会の話が聞かれましたが、まさか女性の脚を見に行き出席していないとも言えず、一緒にさぼった二人に対してお前達のせいで世紀の祭典に出そこなってしまうと恥ずかしいじゃないかと憤慨しておりました。この二人の友も戦争では死ななかったが 10 年位前に死去致しました。（次号に続く）

梨花史学研究所・梨花女子大学史学科・福沢研究センター共催 日韓近現代史をめぐるワークショップ

2014年に部局間協定を締結した韓国梨花史学研究所および梨花女子大学史学科との共催で、8月24日および26日にワークショップを開催した。それに先立ち18日から、例年夏冬に同大学大学院から受け入れている研修生として、博士課程5名修士課程1名の計6名が来日し、調査実習を開始した。23日には白玉敬教授および大学院生5名、24日にはさらに1名が来日した。

24日は午前10時より、三田キャンパス南館5階ディスプレイルームにおいて、福沢研究センターからも学生や調査員が参加して、筑波大学中野目徹教授（歴史・人類学専攻、筑波大学アーカイブズ館長）による「日本のアーカイブズ—その現状と課題—」と題する講義を受けた（通訳 姜兌琬氏）。日本のアーカイブズ制度について歴史的経緯や公文書館法、公文書管理法成立の過程、公文書館・文書館などの施設としてのアーカイブズ、永久保存価値を有する資料としてのアーカイブズ、防衛研究所や国立国会図書館憲政資料室といった類縁機関についての現状および問題点に関して、ご教示いただいた。講義後参加者から、現在問題になっているアーキビストの養成とその配置や、資料のデジタル化と日本における統合的なデータベースの作成の現状などについて質問があり、中野目先生からは韓国より遅れている日本の現状や、地域における資料保存などについて解説があった。



軽食後、佐倉の国立歴史民俗博物館に移動して、バックヤードも含めた見学を行った。京成佐倉駅到着時にあいにくの豪雨

となり、博物館到着が予定より30分程度遅れてしまったため、バックヤードの見学は当初の半分程度になってしまったが、担当者の方の丁寧な説明を受けながら、搬入出口や一時保管庫などを見学した。

また常設展示は、博物館の横山百合子教授の詳しい解説のもとに、特に近世を中心に見学した。長い間、国を閉ざすイメージで語られていた鎖国を、アイヌ・朝鮮・

中国・琉球との交流の視点からとらえ直した導入部分から始まる近世の展示は、歴史を専攻する参加者たちにとって、大変興味深いものであった。さらに横山教授は、特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」についても解説してくださり、短い時間ではあったが、非常に有意義な時間を過ごすことができた。夏休み期間で



あったため、古文書を学習する「寺子屋」等の企画も行われており、韓国の学生にとって面白い体験になったようである。

26日の研究報告会は、午前10時から午後5時半すぎまで、三田キャンパス南館2B42教室において行われた。米山光儀福沢研究センター所長、白玉敬梨花女子大学史学科教授の挨拶のあと、5本の発表（質疑応答を含めて各1時間）と全体討論が行われた。発表は各々の母国語で行い、通訳は姜兌琬氏（福沢研究センター）・具知會氏（同前）、梁熙晶氏が（梨花女子大学）が行った。各発表の内容は、以下のようなものであった。

梁熙晶氏（梨花女子大学）の報告「明治東京における外国人の「居住空間」—築地外国人居留地と外国人の居留地外住居を中心に—」は、外国人と明治日本社会との関係を、彼等が暮らしていた居留地という空間を通して考えるもので、特に築地居留地について、狭義での居留地概念に止まらず、居留地外住居や止宿も含めて捉えていこうとするものであった。その視点から考えれば、築地居留地も再評価することができる（6ページ参照）。

加藤学陽氏（福沢研究センター）の報告「近代日本における法学博士の誕生とドクトル・ユリス（独逸法学博士）」は、近代期日本においてドイツに留学し法学博士の学位を取得した、ドクトル・ユリスと呼ばれる人びとを取り上げ、明治20年代に東京帝国大学法科大学を中心に確立していく法学アカデミズムと関連づけた考察であった。日本における最初の法学博士号は、明治21年5月に5名に対し授与され、その後も同年6月、

明治24年8月、明治26年5月と授与が行われた。しかし、ドクトル・ユリスたちが日本において博士学位を取得していくのは、大正6年の学位令改正後のことで、国家による学問秩序形成上優遇された存在ではなかったが、彼等がドイツから学んだのは最新の理論だけではなく、加えて学問の重要性や研究に対する態度であり、彼らがその後の日本の学問に寄与したものが大きいことを指摘した。

徐延賢氏（梨花女子大学）の報告「開港後における漢城府の道路整備と「近代的」道路構築の意味」は、漢城府の道路が、開港後外国から非衛生的で劣悪であるという指摘を受けたことによって、いかなる変化をとげ、そのことが伝統とどのように関係して近代社会を形成したのかを考察するものであった。朝鮮時代に国家によって管理され、儒教思想と王朝秩序の空間的具現であった道路は、開港後生産や消費、流通の空間を効率よく結ぶ経済的機能を重視する方向に変わり、整備されていた。道路が衛生的で近代的な文明の象徴となることで、従来個人の領域と認識されてきた、物の積載や路傍での休憩といった習慣的な行為までもが禁止されるに至り、「文明化」された道路が人びとの生活を変化させて、新しい規範を与え、これまでとは異なる秩序が生まれ、人権関係が変容したことを指摘した。



柄越祥子氏（福沢研究センター）の報告「昭和初期の私立小学校―慶應義塾幼稚舎を事例として―」は、1920年

代以降、天皇制教化体制が強化される中での私立小学校の変化を、慶應義塾幼稚舎を事例に考えるものであった。日本の私立小学校は公立小学校の傍流といえるが、それでも明治期には補完的役割を担う存在として、大正期には大正新教育運動のもとに創立された。慶應義塾幼稚舎は、当初創立者である和田義郎の塾としての色彩が強かったが、明治31年に慶應義塾内に確立した一貫教育体制によって、純然たる附属の学校となった。そして昭和期に入ると教化総動員運動などを背景に、各種儀式や宮城遙拝を行うようになり、雑誌『祖国』に掲載され

た慶應義塾への批判を巡る訴訟事件を契機に、それまで福沢諭吉の教育理念という緩い繋がりのもとにあった慶應義塾との関係が変化し、ある種の慶應義塾らしさをなくして自主規制していくことで戦時教育体制内化していったことを指摘した。

文智炫氏（梨花女子大学）の報告「米軍政期における左翼の女性運動と啓蒙活動―女性雑誌『女性公論』を中



心に―」は、米軍政期に家父長制や男女差別からの解放を求めて展開され、その後の韓国における女性解放の目標や方向性を示すことになった女性運動を、『女性公論』という雑誌を通して検討するものであった。同誌を号別に検討すると、めざす国家像の相違や左翼勢力に対する弾圧、右翼の女性と米軍政の女性観や女性政策への批判から、次第にアメリカや米軍政に対する非難が高まっていくのが確認できる。また女性解放には民族解放が前提であり、かつ階級解放と不可分の関係にあると捉え、当面の目標を民族闘争と階級闘争に定め、朝鮮の女性たちを啓蒙すべきであると主張し、運動の実践として労働者の組織化や、その結果懇談会・読書会・講習会など啓蒙教育運動も行った。しかし、同運動には性別役割分業論や、家父長制改革にまで議論を進められない、左翼系の政治的立場に影響されたといった限界もあったことを指摘した。

各報告に対しては、横浜など他の居留地との相違、日本政府が海外での博士号取得者に改めて日本の博士号を与える意味や意図された学問的秩序について、漢城府の道路形成の軍事的要因や日本政府との軋轢、大正新教育運動下で設立された他の私立小学校と慶應義塾幼稚舎との差異や修身教育の変化、在日朝鮮人たちの女性運動や北朝鮮における雑誌との比較など、様々な質問がなされ、議論が活発に行われた。紙幅の都合上、ここに詳細を報告することができないが、各々がこの発表と議論を踏まえ、論文を作成し報告するであろう。

今回のワークショップが、報告者のみならず参加者にとっても、研究に寄与するものとなることを願っている。（文責：西沢直子）



ワークショップに参加して

梁 熙 晶

梨花女子大学史学科と慶應義塾福沢研究センターとの縁は、2005年までさかのぼることができる。2014年には、当時の所長である岩谷十郎先生と、副所長の西沢直子先生が韓国を訪れ、梨花女子大学の大学院生を対象に講義をしてくださったことをきっかけに、両校との本格的な交流が始まることになる。2014年には梨花女子大学の梨花史学研究所と福沢研究センターが協定を結び、以後梨花女子大学の大学院生たちが短期研修を定期的に行うなどの交流がなされてきた。

今回のワークショップもそれらの交流活動の一環として設けられたものであるが、大学院生たちを中心に直接的な学術交流ができた点から、とても有意義な機会になったのではないかと考えている。講義をしていただいたり、短期研修で資料収集を行うことももちろん研究活動に欠くことができない大事なことはあるが、折角交流が進んでいるので、もっと直接に日本の大学院生たちと話し合える機会がほしいと考えていた。今回のワークショップは、まさにそのために設けられたものである。

報告者5名は皆近代史を研究してはいるが、日本史だけではなく韓国史の研究者も含まれており、各々の研究テーマも様々であった。梨花からは報告者以外にも大学院生たちがワークショップに参加したが、参加者たちもまた韓国古代史から日本近代史まで研究領域が多様であった。その上、通訳がいるとは言え、言語の障壁もある。個人的には、果たしてどこまで学術交流が期待出来るか心配でもあった。

ところが、少なくとも梨花の大学院生たちにとっては、ワークショップはとても有意義なものになったようである。韓国史を研究している者のほとんどは、海外で学術報告を聞くこと自体が初めての経験であったこともあり、すごく刺激になったと言っている。特に近代韓国史を研究している院生には、自分の研究時代について視点を変えて考えてみる良い契機になったと思われる。

今回のワークショップは「近代」という時代像を、多様な視点から見直す時間となった。西洋のアジア進出に伴い開国し、「近代」を迎え入れたアジアの国として、韓国と日本の近代史には共通する点が多い。その共通点から考えられる「近代」像、そしてその中から窺える日本と韓国との違いは、近代史を研究するものとして、とても興味深いところであった。

「近代」がもたらした時代的变化は、先ず都市空間の変化から窺える。東京における外国人居留地の設置がその都市空間を多国籍な空間へと変えていく様子や、ソウ

ルにおける道路の変化が都市空間の外見のみではなく、そこに暮らす人々の認識さえも変えていく有様は、両国における「近代」の始まりがいかなるものであったのかを考える上で重要な手がかりを見せてくれる。そういった変化は、思想や学問の輸入からなされたものであるが、近代学問を受け入れる過程には様々な紆余曲折があった。留学生の学問成果を日本社会に適用していく過程や、そういった過程を経て設けられた近代教育制度の中で行われた小学教育の実態などから、近代学問が制度的に社会の中で定着していく様を窺うことができる。そしてその過程の中で芽生えた近代思想が、第2次世界大戦の終戦後における社会運動としてどのように展開されていたのかまで、様々な視点から「近代」を考えるワークショップになった。

私は報告者としてワークショップに参加させていただいたが、報告内容は現在博士論文のテーマとして研究しているものである。研究テーマとしては、築地外国人居留地の設置と返還を中心に、東京における外国人の居住問題とそれが日本社会にもたらした影響についての研究を行っている。今回のワークショップでは、研究の方向性を紹介するものとして、築地居留地の特徴を概略し、その特徴と密接な関係がある外国人の居留地外居住問題について触れた。

今回の報告は研究の方向性を紹介する程度のものに過ぎなかったが、それでも様々な助言をいただくことができて、個人的には意味が大きい。今後はワークショップでいただいた助言を活かし、外国人の居留地外居住の実態をもっと明確にし、その上で築地居留地の役割について考察していきたいと思っている。幸いなことに、現在私は慶應義塾福沢研究センターの准訪問研究員として来日しており、1年間日本で研究活動を行う予定である。これもまた両校間の交流のおかげでできたようなものであるが、韓国で日本史を研究しているものとしては、資料収集などの面でこの上ないほどの好機会である。

外国人の居留地外居住には、日本人経営の旅人宿やホテルといった宿泊施設の他に、英和学校、女子教育奨励会なども関わっていたことがわかっている。これらに関する資料収集が第一の目標である。そして築地居留地の場合、主に西洋人居留民に関して研究が行われてきたが、中国人の東京居住問題も一緒に考えてみたいと思っている。そしてその成果を、また梨花女子大学史学科と福沢研究センターの交流の場でご報告できたらと願っている。

慶應義塾福沢研究センター所蔵 水上瀧太郎「遺品」の紹介

水上瀧太郎研究家 網 倉 勲

水上瀧太郎の業績と「遺品」の概要

水上瀧太郎（本名・阿部章蔵）は義塾在学中に、永井荷風の推挙により創刊直後の『三田文學』に「山の手の子」を発表して文壇に登場した。父・阿部泰蔵は福沢諭吉の高弟で明治生命保険株式会社の創立者であった。久保田万太郎らと共に瀧太郎は三田派を代表する作家として、短歌、戯曲、小説、随筆と多方面で活躍した。瀧太郎の文学的生涯は作家と実業家（明治生命保険株式会社専務取締役。当時の明治生命保険には社長職位はなく実質的社長）を併進した事に特色がある。代表作「大阪の宿」など一連のサラリーマン小説を始め、「貝殻追放」を通底しているのはサラリーマンの視点である。

『三田文學』が大正14年に休刊になったとき、雑誌復活運動の中心となって奔走したが、万太郎は「精神的主幹」として瀧太郎の存在を賛美した。昭和15年3月15日逝去したが、『三田文學』は直ちに「水上瀧太郎追悼号」（臨時増刊号）、「水上瀧太郎一周忌記念特輯号」によって哀悼の意を表した。

平成22年10月開催の「『三田文學』創刊100年展」で「三田文学の恩人、水上瀧太郎」として「特設コーナー」を掲げた。岩波文庫『銀座復興』の発刊や新派劇「銀座復興」（平成28年9月）など瀧太郎作品を再評価する動きも出てきた。福沢研究センターでは「遺品」の調査・整理を進めているが、完成には日時を要するので本論では「遺品」の概略と特徴的な資料を紹介する。

「遺品」は瀧太郎の長男・阿部優蔵氏（故人）のご厚意によってセンターに寄贈されたものであるが、優蔵氏関係のものを含めて段ボール箱五個に及ぶ量である。小説原稿、私信、趣味の絵画、『貝殻追放』、『果樹』など自作の単行本などに加えて勤務先の明治生命保険株式会社の社内誌『社報』を含むことに特徴がある。また瀧太郎追悼文を掲載した雑誌などがあり、瀧太郎の人柄や交際の広さを示す貴重な資料である。

小説原稿・書簡・絵画・写真

小説では「ベルファストの一日」「楡の木陰」「祭の日」「水夫の家」など、瀧太郎が米・英留学中の体験をもとに執筆した作品の原稿を始め、『水上瀧太郎全集』（岩波書店）の「遺稿」として収録された「江戸兼」「邪魔もの」「都会悲劇」「春の旅」など戯曲を含む原稿がある（主要

なものは11編であるが、その他断片的なものは多数ある）。なお、他の作家のものでは泉鏡花「下六番地より」と小山内薫「尼」の原稿がある。

日記・私信類は瀧太郎が公表を拒んでいたこともあってこれまで公表された物は限られているが、「遺品」の中には「親馬鹿の記」を彷彿とさせる章蔵名の優蔵宛や妻・都宛及び母・優子宛書簡があり瀧太郎が身近な存在として感じられる。仙波均平宛書簡・葉書が50通を超えるが、筆まめの瀧太郎独特の小さな字で用紙裏表にびっしりと書き込まれている。鏡花、宇野信夫など文学関係者から瀧太郎、優蔵宛の書簡や葉書が多数ある中、岡田八千代が度々、都に近況報告をしているのが目立つ。中でも注目される3通の書簡を紹介する。一つは普通部での親友・仙波宛、明治38年6月5日付け書簡である。野球に熱中するあまり、2年3年と留年を余儀なくされた時期であるが、青春期の煩悶を訴えているものである。共通の友人、松永干城が退学し、仙波も美術の道に進むことになり瀧太郎は取り残される。「僕ハあまり頑固過ぎて人づきあひが悪くボールなどをやつて居ても眞の友人は少ないのです」「君ハ他校に行かれ又僕と仲よしだつた松永ハ他國の空に月を見て居る此の頃僕ハ今年程悲しい了はありません」「此方から永久の御交際を願ひたいのです 何卒御交際あらん了を望む」と仙波に書き送っている。この抒情的感情は「山の手の子」や「ものゝ哀れ」など初期の作品に通底するものである。二つは滞米中の体験を述べた大正3年2月6日付け母・優子宛書簡（8枚に及ぶ）で、米国の新聞にルーズベルトが自伝起稿中に日露戦争では、劣勢にあった日本の天子様がルーズベルトに仲裁依頼状を出していると報じているが、自分としては信じられないと述べている。米国の新聞は全くあてにならないとした上で、アメリカ人の日本に関する知識は「前帝国大学教授チエンバレン、前帝国大及早大の先生扱ラフカディオ・ハーン（日本にては小泉八雲と号したる先生）及び仏蘭西の海軍々人ピエル・ロチ等の書にて得たるもの」と日米の相互理解の難しさを指摘している。この時期は「カリフォルニア州の排日運動」が激しさを増した時であった。排日運動の模様を伝える米国新聞記事を家族に送ったものがある。人種差別の体験と大衆を扇動するジャーナリズムに対する

不信心は瀧太郎の文学観を転換させる一つの要因であった。大正7年の「貝殻追放」の第一作「新聞記者を憎むの記」は新聞報道批判であった。大正4年10月16日付け仙波宛書簡では、ツェッペリンのロンドン空襲で下宿近くに爆弾が投下され死者や負傷者が多数出たことを伝えている。この体験は長編「倫敦の宿」に描かれている。海外体験はこれまでに太田正文「仙波均平宛水上瀧太郎未発表書翰」（『三田評論』、補遺、補遺＝続）と岩松健吉郎「水上瀧太郎在外書簡―仙波均平宛―」（『三田文学の系譜』）によって一部が明らかにされているが「遺品」の資料はそれらを補完するものとして貴重である。

瀧太郎が美術愛好家だけあって色紙・短冊など多く存在することも「遺品」の特色であるが、子息・優蔵に与えたものと思われる自筆の武者絵や椿の絵など和紙に水彩で描いた物が14点ある。横山大観の掛け軸「山高河長」、荷風の掛け軸、泉鏡花の額入り短冊7品（俳句）を始め島崎藤村（俳句）、泉鏡花（俳句）、大場白水郎（あやめ、水彩）小島政二郎の色紙と里見弴、久保田万太郎、吉井勇、岡田八千代の短歌短冊がある。『三田文学』の表紙絵を描いた鈴木新太郎の8点の水彩色紙（ユーモラスに描く象、犬、猫、ライオン、馬、木馬に乗る幼児、鉄砲などや三田風景）がある。大観・荷風・鏡花・万太郎の軸や俳句は『『三田文学』創刊100年展』の図録「gallery」に収録されたが再度、公開が待たれるものである。写真では一族集合、家族写真など家族思いの瀧太郎の一面を窺い知る事が出来る。滞仏中に同宿した島崎藤村との写真や少年時代のものもある。

興味を引くその他の資料

新聞など切り抜きの中で注目されるのは「かまくら広報」で「鎌倉と作家」上下欄の昭和54年11月1日付第21回、11月15日付22回である。父・泰蔵の鎌倉の別荘に関する記事である。嵐と津波の恐怖に怯えた一夜を戯曲として作品化した「嵐」（大正7年）の舞台である。明治33年に長谷稲瀬川144番地（現在は長谷2丁目5番30号付近）あたり約八百坪を買って別荘を作ったこと、明治38年瀧太郎が別荘に避暑していたとき、由比ヶ浜でおぼれかかった学生を友人の田中賢と救助したこと、大正12年の関東大震災では夫人と避暑に来ていたが長谷の山林に避難したことが紹介されている。人命救助の話は「順風」に、田中賢は「賢さん」に、関東大震災は「九月一日」に作品化されている。

もう一つは「成人教育協会淀橋講座」のチラシである。成人教育協会は大正13年に義塾監事・理事であった石

田新太郎によって創設されたものである。「教養を愛する國家社會は生命無窮である」など五箇条の「宣言」を掲げている。淀橋、四谷、花巻などで講座を開き教養普及に努めた。小林澄兄や小泉信三など義塾メンバーがバックアップした。チラシは大正14年3月に瀧太郎が「文学史に於ける小説の意義」と題して「四回＝六時間。自七時半至九時」（赤字で書き込み）に行った講演内容が記載されている。但し、「瀧」の字を間違ふなど杜撰が目立つ。小説構成の三要素、小説の表現形式、小説の二大主義、我国の小説史（政治小説から新感覚派）など8項目が列記されている。しかし、この講演を取り上げた協会機関誌『成人』9月創刊号には「浪漫主義の小説（小説の話其の一）」とあり、10月号の「編輯だより」には「前號掲載の水上先生講和は御承諾を得ませんでしたから本號から掲載しません」とある。『成人』創刊号を出すに際して3月の講演を掲載したが、まとめ方が瀧太郎の意に添わなかったため掲載を中止したと思われる。講演目次の途中から掲載が始まっているのも不自然である（『水上瀧太郎全集』にも未収録）が今後の調査を待ちたい。

【関連事項】

神奈川近代文学館所蔵「靱山仁三郎宛水上瀧太郎書簡」

瀧太郎の海外体験の関係で神奈川近代文学館所蔵の靱山仁三郎宛書簡を紹介しておきたい。靱山（塾員）は『三田文学』の発行所の靱山書店の社長であり、瀧太郎の『処女作』『その春の頃』など初期の作品の出版をしている。所蔵は封書12通、葉書1通、絵葉書10通の23通である。注目されるのは大正3年1月10日発信、同年2月4日発信、同年2月19日発信、同年3月14日発信、大正4年2月16日発信の書簡で、松本泰・五百歌左二郎・邦枝完二・増田廉吉と同人雑誌発行を計画しており、そのアドバイスを靱山に求めたものである。同人雑誌はマンネリ化するので期限を区切るべきだ、出版経費の損失は自分の印税を当てたいなどかなり具体的であったが、結局頓挫した経緯を綴っている。この時期、創作意欲が高まり200枚位は書き溜めたと近況を報告している。また、荷風の「日和下駄」を称賛する一方、『三田文学』に「浅薄な気障な江戸がりや狭斜文学や歴史に材をとりしもの」が集まることに懸念を表明している。荷風時代の末期状態を伺わせて興味深いが、同時に新人の登場に十分対応できない不満が同人雑誌発刊の動きになっていたとも推測される。

平成28年度 『福翁自伝』をたどる旅 および 中津市アーカイブズ講座

本年度も一貫教育校生(高等学校課程)、大学生、大学院生とともに、大阪および中津において、史跡見学やアーカイブズに関する実習を行った。まずは8月8日(月)から2泊3日の日程で、一貫教育校生および大学生と『福翁自伝』をたどる旅」と称して、福沢諭吉が生まれ、かつ20歳以降の青年時代を過ごした大阪と、1歳半から19歳までを過ごした中津の関連史跡をめぐり、夜は日中の見学をふまえながら、『福翁自伝』に込められたメッセージについて話し合いを行った。さらに中津では、中津市が行うアーカイブズ講座初級の部に参加し、中津南高校・東九州龍谷高校の学生とも交流しながら、古文書を読むための基礎知識に関する講義やくずし字を読むワークショップ、また大分県公文書館高木翔太先生の指導のもと、襖に貼り込まれた古文書の剥がし方や、資料の現状を記録するための写真の撮り方などを学んだ。さらに最終日には、福沢が景観保護に尽力した耶馬溪競秀峰などを見学した。

参加者は、高校生6名(志木高3、ニューヨーク学院3)、学部生6名(文学部1、商学部1、総合政策学部2、環境情報学部2)であり、引率は大塚彰(志木高)、斎藤秀彦(横浜初等部)、末木孝典(慶應義塾高)、都倉武之



(福沢研究センター)、西沢直子(同前)、馬場国博(SFC)、松岡李奈(福沢研究センター)、横山寛(同前)であった。

<『福翁自伝』をたどる旅 詳細>

8月8日 8:00 東京駅発 のぞみ207号
10:33 新大阪駅着

【福沢諭吉関係史跡の見学①】

慶應大阪シティキャンパス・適塾(外観のみ)・大阪慶應義塾跡・福沢諭吉生誕地記念碑・大阪大学総合学術博物館

15:42 新大阪駅発 のぞみ35号
17:55 小倉駅着
19:30~21:30 『福翁自伝』読書会

8月9日 8:57 小倉駅発 ソニック5号
9:31 中津駅着

【福沢諭吉関係史跡の見学②】

村上医家史料館・中津市学校の門(生田門)・増田宋太郎生誕地・福沢諭吉旧邸および福沢記念館

13:30~17:00 中津市立小幡記念図書館
古文書講座 50分×2回

19:30~21:30 『福翁自伝』読書会

8月10日 9:00~11:00 中津市立小幡記念図書館
古文書講座

【福沢諭吉関係史跡の見学③】

青の洞門・競秀峰・羅漢寺

16:30 北九州空港発 JAL376便
羽田空港到着後解散

大学院生は、続いて8月9日(火)から4泊5日の日程で始まった、アーカイブズ講座中級の部に参加した。本年度は代々医師であり、また明治期には地域の教育にも携わっていた横井家の襖の下張り文書について、目録採りを行った。本年度は、中津市主催の講座で古文書の解説を行っている市民の方々も参加され、活発な意見交換を行いながらの作業となった。一貫教育校生・大学生向けのプログラムは今年で5年目、大学院生向けのプログラムは8年目になった。



<中津市アーカイブズ講座 中級者の部 詳細>

8月9日 13:30 開講式 中津小幡記念図書館
中津市教育長・別府大学アーカイブズセンター長挨拶・参加教員紹介

14:00 講義①「福沢諭吉と中津」西沢直子

15:15 講義②「地域アーカイブズ整理
現状記録と写真撮影」
針谷武志先生(別府大学)

19:00 講義③「福沢諭吉を巡る“資料”―
歴史研究と資料について考える―」
都倉武之

8月10日 9:00 講義④「襖の下張り文書 解体整理方法について―歴史資料の必要
性と保存―」
高木翔太先生

10:45 福沢旧邸・福沢記念館見学

13:30 整理・目録作成実習

8月11日 9:00 整理・目録作成実習

18:30 学生親睦会

8月12日 9:00 整理・目録作成実習

	19:00	実習中間発表
8月13日	9:00	整理・目録作成実習
	10:45	実習成果発表
	12:15	閉講式 中津市教育次長挨拶

■ 参加記

A グループ (小林海人、後野篤郎、齋藤陽英、石川愛花、伊藤久博、及川泰司)

A チームでは、どのような要因が福沢諭吉先生という人物を生み出したのかについて議論した。そして議論していく中で、中津が福沢諭吉先生を生み出す上で最も重要な土地であると考えた。

よってまずは中津の地の特徴と、当時の福沢先生の心境や状況をまとめた。

【中津の特徴と当時の福沢先生の心境・状況】

- ・中津は封建的な風土が強く根付いており、身分制度が厳しく生まれた時からルールがほとんど決まっている。父も封建的な風土に苦しめられる。
- ・武士の中での福沢家の身分は最低で、出世に限界があることが目に見えている。
- ・乞食のシラミ取りをすることからわかる母のあたたかさ。
- ・中津は長崎に近く、オランダ語に少し精通している町で、西洋学問が少し浸透していた。
- ・福沢先生は大阪出身であるため、同じ日本語でも、なまりの関係でコミュニケーションが取りづらい。
- ・コミュニケーションが取りづらいことからふさぎ込むようになり、15歳までは当時の学問に一切興味がなかったが、自らサイエンスに興味を持つような様子が見られる。
- ・勉学を始めてからは常にトップクラスの才能。勉強が得意だった。

以上の要素から、中津の特に色濃い封建的な風土に苦しめられた父を見て、その制度に疑問を持ち、母に影響され優しく、当時の学問に疑問を持つような福沢像が思い浮かぶ。中津の地で福沢先生は「人間は本来平等であるべきだ。中津を飛び出し新しい学問に励み、今の身分制度を変えられるような何かを身に付けたい」と思ったことであろう。そして中津を飛び出し大阪で、福沢先生は緒方洪庵の適塾で本格的に自然科学中心の学問に励み、「サイエンスが封建的風土を変える切り口になるかもしれない」と考える。それから“天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずといえり”のフレーズで知られる“学問のすゝめ”や慶應義塾を生み出すような人物へとなっていった。

現代もまた、江戸時代から明治時代が変わったように激動の時代である。“独立自尊”、いわゆる精神的自立、経済的自立を達成するため、時代に合った実学を学ぶ必

要がある。福沢諭吉先生のように、常に世の中に疑問と志を持ち、新しい学問を吸収するための開拓精神を忘れてはならないと思った。(文責：及川泰司)

B グループ (須山琉、竹田竣介、吉崎優司、藤枝拓都、山口真璃、吉岡太郎)

私たちの学び舎、慶應義塾大学の創始者である福沢諭吉先生がどんな人物であったのか。そして、彼がどのような想いで慶應義塾大学を創り、日本の未来を描いたのか。それを折にふれて考える塾生は、ほとんどとっていないのが現状である。私たちもその一人だった。しかし、学び舎のルーツさえ知らずして、そこで何を学ぶのだろうか。そんな想いから福沢先生の生誕の地を巡る本プログラムに参加した。プログラムに参加する以前の私たちの福沢先生に対するイメージは、真面目で勤勉、才能に恵まれた有識者。固くて自分たちとはかけ離れている印象を持つ人が多かった。しかし、このプログラムを経て皆が口を揃えていったのは、福沢先生は非常に人間味あふれる人だったということである。劣等感を感じることもあれば、愚痴をこぼすこともある。酒で失敗をすることもあれば、家族を愛する父親の側面ももつ。ありとあらゆる福沢諭吉という人物像が浮き彫りになり、各々が自分たちと重なる側面を見つけることができ、不思議と親近感を覚えるほどになった。

プログラム内容は自伝『福翁自伝』を各自事前に読み、読書会でディスカッションをしながら、実際に福沢先生縁の地に足を運んで学びを深めるものだった。読書会は2グループに分かれ、2日に亘る議論を終え、私たちの班は下記の2点の結論に至った。

1. 人のアイデンティティ、考え方にはその人が育った環境、家庭などルーツがすごく影響する。
2. 環境を飛びだしてみる＝独立自尊

1に関して、福沢先生は土農工商、封建制度に対して強い違和感を感じていた。だからこそ、儒学に基づいた教養ではなく、実学(サイエンス)に基づいた学問を作るために慶應を作ったが、その考えに至るには、彼が当時従来の土農工商の身分制度とは少し離れた商人の町大阪で生まれたことや、武士としては位が低く貧しかったこと、大阪の適塾で医学の勉強をしていたことなど、そういった考えに至った経緯がルーツをたどればスムーズに納得できた。

2に関して福沢先生は、彼の「人誰か故郷を思わざらん、誰か旧人の幸福を祈らざる者あらん」の言葉通り、とても故郷を愛している人間だった。ところが、自伝の中では故郷である中津は批判の対象となっていて、中津に対する想いや故郷への貢献活動などはほとんどとっていないほど触れていなかった。これはなんでだろうということが、私たちの班の最大の争点だった。私たちの出した結論は、独立自尊が先決だということを読者に対し

て訴えたかったからであろうというものであった。その頃の封建制は、身分は決まっているが、裏を返せば身分に守られている、居心地のいい環境なんだと言える。ただ、福沢先生はそれではいけない、個人が自分の意思を持って精神的に、そして経済的に自立することが必要だと思っていた。だからこそ敢えて故郷への想い等は伏せて、日本の封建制の象徴として中津を特筆し、それを批

判することで将来日本を担うであろう若者を煽ろうとしたのだという結論に至った。

掘れば掘るほど人間味溢れ、誰よりも未来を見据えていた福沢諭吉という人物を見ていく中で、私たちは自身についても改めて考えることができたと言える。

(文責：吉岡太郎)

主な動き

■ センター公開講座

日吉キャンパスで開講している設置講座「近代日本と福沢諭吉Ⅰ」では、今年度もゲストスピーカーをお招きして公開講座を開催、清家塾長(6月13日)、神代忠男氏(6月20日)、橋本五郎氏(6月27日)に特別講義をお願いした。神代氏の講義内容については p.3 を参照されたい。

■ ワークショップの開催

6月17日に「東アジアの近代とアメリカ留学」と題するワークショップを開催した。これは本年3月11日に開催された同じタイトルのワークショップと対をなすもので、前回が韓国からアメリカへの留学に関する発表内容であったのに対し、今回は中国からアメリカへの留学がテーマであった。報告者には亜細亜大学経営学部教授の容應英氏をお招きし、コメンテーターには前回に報告をお願いした大妻女子大学短期大学部名誉教授高木不二氏をお招きした。

■ 新収資料展

これまで1月10日の福沢先生誕生記念会に合わせて図書館旧館で開催されてきた新収資料展は、昨年末からの改修工事によって建物が封鎖となり、また、年末から年始にかけてセンターの旧館から南館への移転があったため、開催することができなかった。そこで7月1日から30日までの1ヶ月間、三田キャンパスにある図書館新館の展示室において資料展を開催した。例年の展示は1月10日の1日のみであるが、今回は期間が1ヶ月に渡ったため、福沢関係資料のほか、福沢や門下生による著作の刊行で使用した明治期の版木、さらには戦争プロジェクトで収集した資料なども合わせて展示した。

■ 図書管理システムの導入

センターで整理・保管している図書は、これまでアクセスを使って管理してきたが、データ量や検索機能の面で限界となっていた。このため、諸学校ですでに実績のある小規模図書館向けの図書管理システム、ライブマックスを導入することとし、7月13日～14日に設定作業を行った。

■ センター仮移転後の動き

図書館旧館の改修工事に伴うセンターの仮移転から半年以上が経過した。移転先にはスペースの余裕がなく、急な来客や調査員の作業場所確保に苦慮していたが、6月から管財部の協力を得て9階に大きめの部屋を借りることができた。移転期間中の閲覧サービスは停止しているが、これにより、例外的に認めた閲覧者の対応や、調査員の作業スペースとして日々活用している。

仮移転後も旧館地下に保管されていた明治期の版木約1,500枚は保存環境の問題もあって、かなり以前からカビが発生していた。このため5月24日から26日の3日間をかけて専門業者によるアルコール洗浄を行った。

洗浄が済んだ版木は、今は空となっている事務スペースを利用して著作ごとに仕分し、必要であれば展開をして当時の印刷工程を検証した。版木は最終的にダンボール詰めした後、8月8日に日吉西別館に移送した。なお、西別館には数年前、先行して三田から移送された版木があり、今回すべてが一箇所に集約されたことになる。

今の学生にとって、版木はおそらく一度も目に触れたことのない文化財であろうとの推測により、先にふれた新収資料展では何枚かを展示した。それらは学生のみならず、研究者からも反響があった。

■ 海外との交流

センターと部局間協定を結んでいる梨花女子大学から、今年も6名を短期研修生として8月18日から27日まで受け入れた。さらに8月23日から27日まで7名が来日したので、これを機に8月24日、研修プログラムの一貫として講演会を開催、筑波大学から中野目徹教授をお招きして「日本のアーカイブズーその現状と課題ー」と題するご講演をいただいた。

同日、西沢教授がセンター調査員とともに研修生を引率して佐倉にある国立歴史民族博物館を見学した。

さらに8月26日、「日韓近現代史をめぐるワークショップ」を開催、両国から研究成果を発表するとともに、活発な意見交換を行った。詳細は p.4～6。

■ 資料の燻蒸

今年度も夏季一斉休暇中に資料の燻蒸を実施した(8月10日～14日)。

福沢研究センター諸記録(2016年4月～2016年9月)

■ 諸会議

- *平成28年度執行委員会(5月24日、7月26日、9月28日)
- *小泉基金運営委員会(7月12日)
- *平成28年度第1回運営委員会(7月28日)
- *『慶應義塾150年史資料集』編纂委員会(9月13日)
- *平成28年度第1回福沢研究センター会議(6月14日)
- *『近代日本研究』第33巻編集委員会(8月29日、9月28日)

■ 人事

- 〈所 員〉 新任 大久保健晴(法学部准教授) 4月1日～
異動 結城大佑(ニューヨーク学院) 4月1日～
〈研究嘱託〉 新任 石田幸生(亜細亜大学都市創造学部講師)
4月1日～
〈准訪問研究員〉 梁熙品(梨花女子大学) 7月1日～(1年間)
〈事務局〉 退職 印東史子(事務嘱託・任期満了)
～9月30日
新任 加藤学陽(非常勤嘱託) 5月1日～

■ 主な来住

以下、戦争プロジェクトに関連する聞き取り調査には(聞)を付す。

- *岸秀雄氏、伯父岸初雄氏関係資料を寄贈(4月3日)
- *石河明子氏来訪(4月14日)
- *三村和子氏、故三村亮平氏旧蔵品を寄贈(4月23日)
- *島田国生氏、小泉信三筆献辞入図書を寄贈(4月19日)
- *須田清雄氏、曾祖父須田辰次郎氏資料の閲覧で来訪(5月9日)
- *河西宏和氏ほか来訪、アルバムを持参(5月12日)
- *秋田三田会畠山茂氏来訪(5月17日)
- *山名昭三氏来訪(聞)(5月18日)
- *デンバー大学 Orna Shaughnessy 氏、資料を閲覧(5月20日)
- *佐藤滋一氏、田辺実氏来訪(聞)(6月3日)
- *岩上寛治氏、尊父岩上幸英氏関係資料を寄贈(6月9日)
- *台湾研究基金会黄煌雄氏、國史館館長呉密察氏、日本大学三澤真美恵教授来訪(6月10日、14日)
- *毎日新聞広岩近広氏来訪(6月15日)
- *石坂研究会近藤紀孝氏、猪股靖氏、西川進氏来訪(6月20日、9月14日)
- *連合三田会事務局長村田作彌氏ほか資料閲覧(6月22日)
- *山名昭三氏、資料を寄贈(7月1日)
- *近藤武彦氏来訪、近藤良薫関係資料を持参(7月1日)
- *竹屋、笹島恒輔教授旧蔵資料を寄贈(7月4日)
- *梅田耕三郎氏来訪、所蔵資料の借用(7月5日)
- *北野雅子氏、北野祐秀氏の五輪メダルを寄贈(7月6日)
- *東京新聞の取材対応(7月6日)
- *山崎忠氏来訪、資料を寄贈(7月8日)
- *渡洋二郎氏来訪(7月8日、22日、9月2日)
- *田村俊作名誉教授、白井文子氏来訪(7月12日)
- *中国新聞岩崎誠氏来訪(7月15日)
- *首都大学クリス・ベルアド氏来訪(7月20日)
- *森田優子氏、曾祖父栗田宗次氏関係資料を寄贈(7月22日)
- *港区への資料貸出(7月26日)、返却(8月18日)対応
- *安井裕二郎氏、時事新報関係資料を寄贈(8月24日)
- *愛知大加島大輔氏、林毅陸関係資料を閲覧(9月9日、12日)
- *ジェフリー・ノット氏来訪(9月23日)
- *中津教育委員会吉川和彦氏、資料を閲覧(9月29日)
- *青柳保子氏、杉本鉦子関係資料の閲覧(9月30日)

■ 出張・見学

- *都倉、メディアコム研修会参加のため葉山(4月22日)
- *都倉、竹屋、印東、横山、資料受取のため故竹田行之氏宅を訪問(4月27日)
- *米山、福沢旧邸保存会理事会のため中津(4月28日)
- *都倉、伊沢正八氏宅を訪問(聞)(5月9日)
- *西沢、資料調査、古文書講座の打合せのため中津(5月12日)
- *西沢、福沢旧邸保存会評議員会出席(中津)(5月13日)
- *都倉、石川凱一氏宅を訪問(聞)(5月16日)
- *西沢、拓殖大学名誉藤村幸義教授、広東外語外貿大学龍蕾氏と日吉で面会(5月16日)
- *都倉、日本医史学会に出席のため広島(5月21～22日)
- *都倉、若杉、吉田晴彦氏宅を訪問(聞)(5月25日)
- *西沢、竹屋、全国大学史資料協議会東日本部会総会(5月26日)
- *山内、都倉、資料受取のため故松尾俊治氏宅を訪問(7月5日)
- *都倉、横山、上原家調査で里井義徳氏宅を訪問(7月14日)
- *都倉、日吉で立川重子氏の聞き取り(7月15日)
- *都倉、横山、中村、上原家調査のため安曇野(7月28～31日)
- *都倉、資料調査のためモーリシャス(8月18日～9月6日)
- *西沢、目賀田種太郎展内覧会：たばこと塩の博物館(9月16日)

■ 講師派遣

- *西沢、信濃町地区専任職員(新任者)オリエンテーションで講義：「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月1日)
- *都倉、信濃町研修医・専修医の新任者オリエンテーションで講義：「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月1日)
- * (看) 山内所員、理工学部新任教員ガイダンス：「慶應義塾の原点」(4月4日)
- *西沢、SDM 合宿で講義：「福沢諭吉と新しい時代」(4月9日)
- *都倉、中部で授業：「独立自尊と慶應らしさ」(4月11日)
- *都倉、船橋三田会福沢精神研究会で講演：「『多事争論』とは何か?」(4月17日)
- *都倉、職員水曜懇話会で講演：「『慶應義塾と戦争』アーカイブ・プロジェクト中間報告一特に集まったモノのこゝろ」(4月21日)
- *都倉、福沢諭吉記念文明塾で講義：「福沢諭吉の本気度を考える一文明の『始造』を目指して」(4月28日)
- *米山所長、福沢諭吉記念文明塾で講義：「福沢諭吉教育論の現代的意義」(5月12日)
- *西沢、福沢諭吉記念文明塾で講義：「人間交際と家族」(5月21日)
- *都倉、SFC「慶應義塾入門」で講義：「震災復興と福沢先生」(6月10日)
- *都倉、SFC 中部道徳授業で講義：「慶應らしさと福沢諭吉」(6月23日)
- * (文) 井奥所員、西沢、文学部公開講座「文学部を体感する」で講演：「食文化と家族」(7月2日)
- *都倉、モーリシャス大学で講義：「The War and Individuals, Families and Universities」(9月1日)
- *都倉、和歌山県岩出市講演会で講演：「濱口梧陵と福沢諭吉」(9月17日)
- * (経) 宮内所員、SDM 合宿で講義：「On the *An Outline of a Theory of Civilization* by Fukuzawa Yukichi」(9月17日)
- *都倉、大阪慶應倶楽部関西合同三田会パネルディスカッションで司会：「関西と慶應義塾」(9月24日)

■ その他

- *設置講座ガイダンス：三田(4月5日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第25号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2016年10月31日 (年2回刊)
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1604
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印刷 (有) 梅沢印刷所